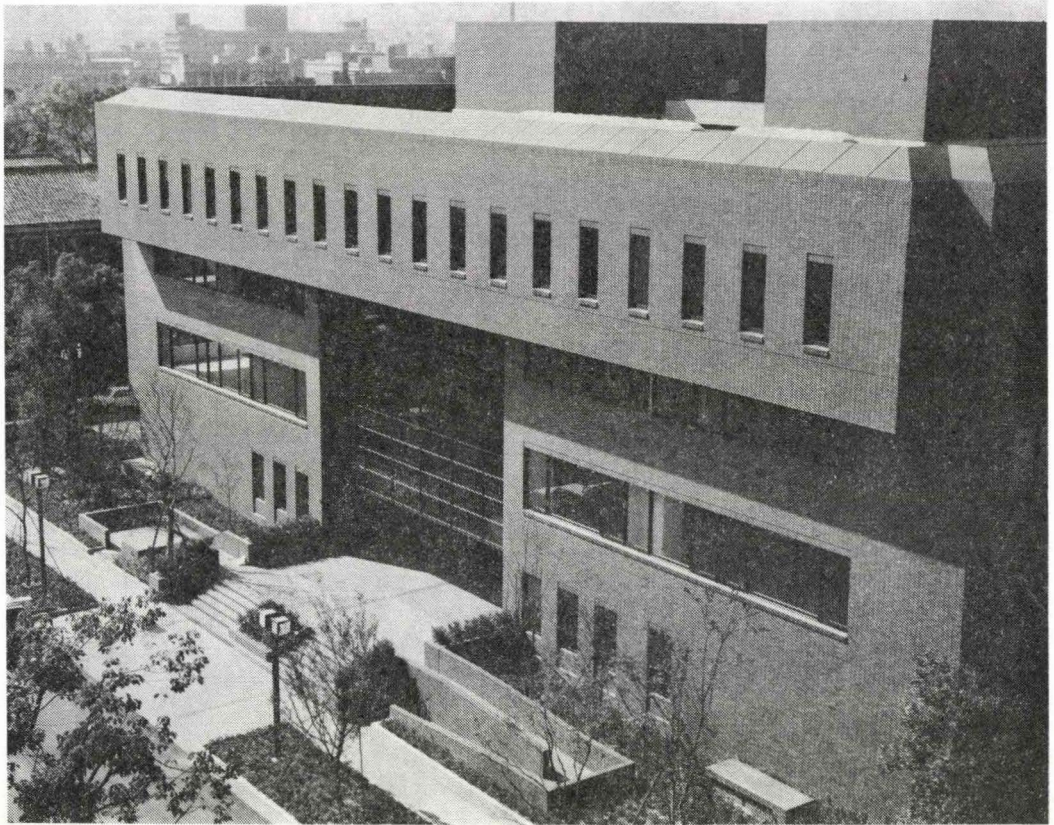


京大広報

No. 262

京都大学広報委員会



新営なった附属図書館 —関連記事本文432ページ—

目次

附属図書館の竣工披露.....	432	<随想>	
昭和58年度京都大学市民講座「自然と生命」		第一教室と松蟬	
講演要旨Ⅱ.....	432	名誉教授 松平 千秋.....	435
<紹介>		日誌.....	436
東南アジア研究センター・海外連絡事務所.....	434	訃報.....	436

〈大学の動き〉

附属図書館の竣工披露

このたび京都大学附属図書館の新営工事（本広報No. 219参照）が完了し、10月29日（土）同館2階開架閲覧室において、関係者出席のもとに竣工披露が行われた。

竣工披露式は、午前11時に始まり、高村仁一図書館長の式辞に続いて、沢田敏男総長の挨拶、林良平前図書館長（名誉教授）の祝辞があり、正午に終了した。引き続き披露パーティーが催され、このあと館内全室が列席者に披露された。

なお、開館は来年3月下旬を予定している。

（附属図書館）

昭和58年度京都大学市民講座「自然と生命」

講演要旨Ⅱ

木は語る

木材研究所教授 島地 謙

木を構成する細胞は、常に環境（天然・人為を問わず）の影響を個々の細胞の諸性質に反映させながら形成層から内側へ内側へと生み出され、年毎のリズムすなわち年輪を刻みながら、その樹木の一生を通じて幹のなかに蓄積されて木材を形づくる。したがって、木の組織は樹木の幹の中心から外側に向い、時間の流れに沿って、細胞という言葉がいろいろなニュアンス（その細胞が生れた時の環境の反映）をもって並んだ一つの物語りといえるのであって、木のなかにはその樹木の一生の物語りが秘められている。我々は木の言葉を理解し、沢山の木の物語りを総合することによって、例えば古代の木質遺物の絶対年代を知ることのできるようになるし（dendrochronology 年輪年代学）、遠い過去の気候変遷（dendroclimatology 年輪気候学）や地表変動（地すべりの結果樹木が傾くことによって生ずるあて材の形成年度と形成方向をもとに推定）のような自然環境の変化の歴史はもとより、森林と人間のかかわり（例えば、高野山国有林コウヤマキ純林が約200年前に植林されたものである可能性）や環境汚染（例えば、群馬県安中市の亜鉛製錬所によるカドミウム汚染年度が周辺樹木の当該年輪に正確に記録されて残る）などのような文明史さえも学ぶことができる。

一方、木の細胞組織は樹種によって

それぞれ環境の影響に左右されない基本的な特徴をもっており、その組織を調べることにより木片の樹種を知ることができる。木片の樹種がわかるということは、その木片に秘められた物語りを更に聴き出す手がかりを与えてくれるのであって、そのことによって我々は学問的にも実用的にもいろいろなことを学ぶことができる。

その一例として、建築材、農耕具、食膳具、丸木舟、棺などの考古学的木質遺物について、時代別、地方別に使用樹種を調べてみると、その適材適所の使い方といい、半製品としてストックすることにより木の内部応力の緩和を計っていたことといい、古代の人々が如何に木の性質をよく理解し、木を生かして使っていたかを知らされる。また、縄文時代以来庶民の生活に密着したものにスギが圧倒的に多く使われていること、そしてそれだけ多く使われてきたにもかかわらず、古代から連綿と植えつがれ、現在でもスギ林が日本全国に見られるということは、日本の庶民とスギのかかわりがいかに深いかということを知られる。飛鳥以来貴族の宮殿・官衛や寺院にヒノキが好んで



使われ始めたことと考え合わせると、我々がヒノキにとりすました気品や一種の冷たさをすら感じるのに対して、スギには多少の野暮ったさを感じながらも、暖かさや気やすさを感じるのは、縄文以来数千年にわたるスギと庶民のかかわりによって培われ、日本人の血となった感覚ではないかと思われる。飛鳥の寺院や藤原宮造営に始まり、支配階級によって続けられた宮殿や寺院の建築ラッシュは、湖南田上山の例に見られるように、千年後の今日なお回復できない程の森林破壊をもたらした。縄文以来の庶民がスギを愛して使い、スギを愛して植えついできたのに対して、大和の貴族達がヒノキは愛したがヒノキの山には思いを致さなかったということはよい対照をなしていると言っては言いすぎであろうか。

早晚底をつくことが明らかな鉱物資源や化石資源にかわって、かけがえのない木材資源を永続させ、木とのつき合いを永く続けるためには、決して大和朝廷の貴族達の二の舞を踏んではならないのであって、これは日本が東南アジアから大量の南方材を伐り出してくるについても忘れてはならない教訓であろう。

ほんのわずかの例ではあるが、木というものが単なる材料としての物質の塊ではなく、いかに多方面にわたっていろいろなことを我々に語りかけているのかということに思いを馳せ、木への親しみと好奇心を深める一助となれば幸である。

(10月29日)

無意識の世界

教育学部教授 河合 隼雄

無意識ということは、古くから問題にされてきたが、それを科学的研究の対象として取りあげたのは、フロイトである。その後、「深層心理学」と呼ばれる、無意識を研究する心理学が発展してきて、現在に至っている。本講においては、深層心理学の知見に基づいて、無意識の世界についての概観を述べ、最後に、この講座のテーマとなっている「自然と生命」ということと無意識との関連について少し触れておきたい。

深層心理学は、神経症の治療という極めて実際的な問題から生じてきたところに、その特徴を有

している。十九世紀の終り頃、フロイトはヒステリーの患者の治療を行い、それが、患者自身が意識していない心的内容を原因として生じていることを明らかにした。フロイトの精神分析の技法によって明らかにされる患者の心の在り方は、それまではまったく意識されていなかったことであり、その心的内容が患者に意識されることによって、症状の発生原因が説明され、また、患者も治療されるのである。

このような点を踏まえて、人間の無意識的な心のはたらきを、神経症々状、言語連想検査による結果、夢、催眠現象、日常の失錯行為、神話・伝説・昔話、などの解明を通じて研究し、それが体系化され、深層心理学がつくりあげられてきた。

人間の無意識内の心的内容は、感情に色づけられて、集合体をつくりあげていることが明らかにされ、それをコンプレックスと呼ぶことになった。コンプレックスは、エディプスコンプレックス、劣等感コンプレックスなどと命名され、それが人間の意識活動にいかん作用をもたらすかについて、多くの研究が行われた。

人間の意識的主体としての自我は、さまざまなコンプレックスに対して、それを抑圧したり、それを他人に投影したりして、その安定感を保っている。

人間の無意識はこのように意識の安定をおびやかすものであるが、よく見ると、それは意識の一面性を補償するようなはたらきをしていることが解る。この点については、実例をあげて説明するが、一見するとマイナスに見える無意識のはたらき——たとえば、神経症の症状など——は、一面的な意識の在り方を改変し、より高次な統合性を自我に与えようとするプラスの面をもっていることが解るのである。換言すれば、それは固定した文化的・社会的規範のなかで、生命力を失い勝ちな自我を活性化するものとして、無意識を生命体の自然のはたらき、生命力の顕われとして把えることも可能なのである。ただ、一方的に無意識のはたらきに身をまかせるときは破壊的になることが多く、意識と無意識との対決と相互作用によってこそ、建設的な自己実現の過程が生じてくるのである。

(10月29日)

〈 紹 介 〉

東南アジア研究センター
海外連絡事務所

東南アジア研究センターは、東南アジアに関する総合的地域研究を行う施設として、昭和40年4月に官制化されたが、創設以来、学際的研究を国際的に開かれた場で行うことをめざし、特に東南アジア各国の専門家との共同研究に意を注いできた。

この方針を具体化したものが、タイのバンコクとインドネシアのジャカルタの二大都市に設置された海外連絡事務所の存在である。バンコクには、東南アジア研究センターが官制化される以前の昭和38年にすでに設置され、次いでジャカルタには昭和45年に設置されて、それぞれ現在に至っている。

これらの海外連絡事務所が、東南アジア研究センターの学際的にして国際的な実証研究を進展させるために果たしてきた役割は、まことに大きい。連絡事務所は先ず何よりも、本格的な現地調査を共同で行う上での拠点として、準備（研究計画の作成、予備調査、関係諸機関からの研究許可の取得等）、実施（現地実態調査）、総括（資料整理、総括会議、研究成果発表等）の各段階で、日本側と相手国側の研究者のよりどころとなっている。現在、東南アジア研究センターでは、五か年計画で「東南アジア世界の形成過程に関する総合的研究」というプロジェクトが進行中であるが、この際にも、連絡事務所はこれを推進する上での要の機能を果たしつつある。しかし、連絡事務所

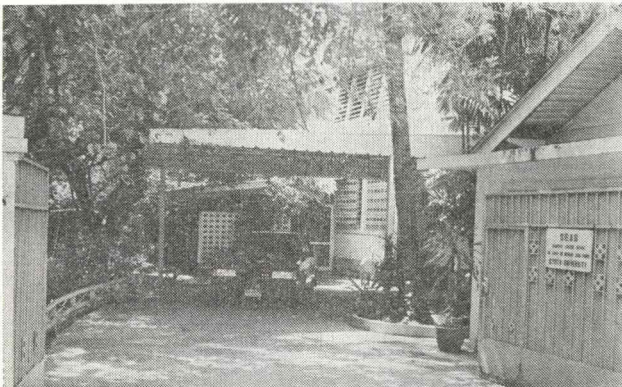


ジャカルタ連絡事務所

は、こうした現地側との共同研究の拠点にとどまるものではない。最新の図書、地図、統計などの資料・情報の蒐集も重要な役割のひとつである。

さらに特記すべきことは、連絡事務所が東南アジア研究センター以外の人たちにも広く利用されていることである。ジャカルタの連絡事務所を例にとると、昨年度にここを訪れた日本人の総計は延221名である。内訳をみると、センター教官以外では本学他部局の教官が44名、他大学の教員と文部省関係者が66名、他省庁関係者36名、留学生など53名である。いずれも調査研究について現地政府と接触するにあたっての援助の依頼やインドネシアの最新情報の問い合わせなどが主な用件で、連絡事務所はできるだけの便宜をはかることにつとめている。連絡事務所には現地の学者や研究者の来訪が多いことももちろんであるが（昨年度ジャカルタで129名）、時には京大に留学経験のある政府高官なども訪ねてこられて、楽しい懇談の場ともなる。この他に、最近では欧米各国の東南アジア研究者の来訪もめだってきている。

このように、連絡事務所は単に「事務所」であるにとどまらず、当該国の研究者などとわれわれとが、ときに研究打ち合わせを行い、ときに学問的議論をたたかわし、ときにはまたひろく社会や文化について歓談する「アカデミック・サロン」として機能していることをも意味している。このような交流を通じて、われわれと東南アジアの研究者との間に、緊密にして息の長い信頼関係が結ばれていくことが、われわれの願いである。なお、バンコク連絡事務所開



バンコク連絡事務所

所式には当時の平澤興総長に臨席いただいたが、歴代総長も二つの連絡事務所を訪問され、ここで現地の大学人や元留学生、あるいは京大の卒業生などと交流・歓談される機会をもたれている。

連絡事務所の開設以来、バンコク、ジャカルタともに、すでに延20名近い東南アジア研究センターなどの教官が常駐し、その管理運営に当たってきた。その滞在を通じて、日本とは異なる風土と文化と社会とを持つ諸国の生身の姿にふれてきた。

政府諸機関・大学との接衝、「町内会」とのお付き合い、現地雇用員の管理、家主との交渉等、時として、とまどいの連続であるが、それらはまた、各々の社会と文化のてざわりを確かめる格好の機会でもあるといえよう。

今後とも、連絡事務所の活動を通して、東南アジア諸国との学术交流が一層深まるよう努力したい。

(東南アジア研究センター)

〈随想〉

第一教室と松蟬

松平千秋



私が文学部に入学した昭和十年は、文学部創立三十周年に当り、本館一正式には第一号館というらしいが一の東側の増築が完成した年でもあって、文学部にとっては記念すべき年であった。この年の秋から着工した南側の増築工事も翌年十一年には終り、本館のブロックが完成したわけで、『京都大学文学部五十年史』によるとこれまでに前後十二年が経過したことになる。同じ昭和十年の秋には、いわゆる東館（第二号館）の建築も始まって、翌年に第一期工事が終わっている。こちらは後に南、北、東の翼が増築されて東館ブロックが完成したのが昭和四十年であるから、ほとんど三十年近い年月がかかっているわけである。

当時はまだくすんだ赤煉瓦の建物が多かったから、色彩も明るくしかも新築早々の文学部の建物は、非常に新鮮でハイカラに見えた。恐らく当時は全学でも特に目立った一劃であったろう。

しかし私が入学したばかりの時には、まだ古い木造の建物もかなり残っていた。本館の南側には事務室と教室、それに教官室もある一劃と別に独立した心理学実験室があった。一見して老朽化した見すばらしい建物であったが、実験

室だけ残して他は東館の着工と並行して取り壊されてしまった。しかし私は少くとも一学期の間は、この教室で新村出先生の言語学特殊講義を聴講した記憶がある。題目は私の思い違いでなければ国語学史に関するものであった。

新しい東館の東にはもう一つ木造の教室があった。いわゆる第一教室である。これも五十年史によると、文学部には大講義室がないので、法経の古い建物を移して、こゝに再建したのだという。何の変哲もなく無闇に天井の高い長方形の建物で、西側に教壇がありその左右に入口がある。教壇の正面つまり東側に主たる入口があるが、こゝから入ると、なんとなく教会へでも入るような気分になる。これは文学部で唯一の大教室であるから、こゝでは受講生の多い講義——一般講義（当時は普通講義と称していた）——とか特別講演が行われていた。私はこゝで田辺元、山内得立、落合太郎などの諸先生の講義を聞いた。また西田幾多郎先生の特別講演を聞いたのもこゝである。西田博士は当時の私ども、特に地方から出て来たばかりの者にとっては、既に伝説的な人物とってよかったが、噂に聞いていたように手をうしろに組み壇上をかなり早足で歩きながら話される姿を畏敬の念をもって眺めていたものであった。尤もどんな話であったか、全く記憶していないのは汗顔の至りと申す外はない。

梅雨に入ると第一教室での聴講は、私にとって大変辛いものになる。文学部の建物ではこの教室が吉田山に一番近いので、その頃になると松蟬の音が風に乗ってさかんに流れてくるのである。小蟬もそうであるが殊に松蟬は、ガジャ

ガジャと鳴く大蟬や油蟬と違って、ゆるやかに而も切れ目のない旋律で歌うので、眠りを誘うにはこの上ない子守唄である。午下りの第一教室に坐って松蟬の声を聞いていると、忽ち抗しようもない睡魔に襲われる。殊に私は当時慢性の胃腸障害に悩んでいたもので、そうでなくても睡気を催すことが頻りであった。腿に錐を刺すほどの勇氣はなし、まゝよと睡魔に屈して鼾でも立て、教授にどられるのを甘受する度胸もない。精々腿をつねって必死に目を覚まそうとするばかりであった。そんな苦行の思い出が第一教室にはつながっているのである。新村先生がいつか普通講義の時に、言語学の講義というもの眠いものだという例に、ドイツ留学中に有名な言語学者ヘルマン・パウルの講義を聴講なさった折、教室の机に「晝寝の場所貸します」という落書を見たという話をされたことがあった。たゞし私の場合はどの講義が眠いとい

うのではなく、全く私の個人的生理現象であったに過ぎないのである。教壇に立つようになってからも、梅雨時の講義は嫌いであった。居眠りをしている学生を見ても叱る気になれないし、それどころか、講義中にしゃべるよりは、居眠りをする方がまだまだなどといわでもがなの放言までついしてしまうのである。

私共の学生時代には立派だった文学部の本館も、今は全学でも最も老朽化した建物の一つになってしまった。雨漏りはするし、壁は汚れ、天井裏には野鳩が巣を作っている。改築も遠からぬことであろうが、生れ変わった本館が再び吉田構内で異彩を放つ日を、OBの一人として待望したい。

(まつだいら ちあき 本学名誉教授 昭和54年退官 元文学部長 専門は西洋古典文学・言語学)

日 誌

(1983年10月1日～10月31日)

- | | | | |
|-------|---|-----|--|
| 10月8日 | フランス共和国国民教育省 Romain Gaignard 国際局長来学、総長と懇談 | 19日 | 国際交流委員会
〃 国際交流会館委員会 |
| 11日 | 評議会 | 21日 | ASEAN 学術代表团 (タイ王国学術研究会議 Choompol Swasdiyakorn 事務局長外5名) 来学、国際交流委員会委員長及び関係教官と懇談 |
| 14日 | 医療技術短期大学部北棟新校舎竣工式 | 26日 | 同和問題委員会 |
| 15日 | 京都大学市民講座「自然と生命」第1日(第2日は10月29日、第3日は11月5日) | 29日 | 附属図書館竣工披露
〃 ドイツ連邦共和国 Alexander von Humboldt 財団 Heinrich Pfeiffer 事務総長来学、総長及び関係教官と懇談 |
| 17日 | カナダ Montreal 大学 Paul Lacoste 学長来学、総長及び関係教官と懇談
〃 中華人民共和国中国政府派遣大学院留学生予備教育に関する中国政府代表团 張 紹書 団長(東北師範大学赴日留学生予備校長)外5名来学、総長及び関係教官と懇談 | | |

訃 報

足利 惇氏 (本学名誉教授・文学博士)

11月2日逝去、82歳。同志社大学文学部卒。昭和25年本学文学部教授就任、40年退官。その間評議員(35年～37年)、文学部長(37年～39年)を歴任。同34年日本学

士院賞受賞、46年勲二等瑞宝章受章。専門は梵語学梵文学。

三浦 運一 (本学名誉教授・医学博士)

11月7日逝去、87歳。本学医学部卒。昭和22年本学医学部教授就任、34年退官。同44年勲二等瑞宝章受章。専門は衛生学、環境衛生学。